慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エスノメソドロジーと間主観主義
Sub Title	Ethnomethodology and 'intersubjectivism'
Author	今枝, 法之(Imaeda, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1985
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.25 (1985.) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000025-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「エスノメソドロジーと間主観主義」

Ethnomethodology and 'Intersubjectivism'

今　枝　法　之
Imaeda Noriyuki

Ethnomethodology has often been labeled 'subjectivism'. But I guess this labeling discribes only one side of ethnomethodology. Though I am neither an ethnomethodologist nor sympathetic to ethnomethodology, as a student to be interested in social theory I try to consider this estimation of ethnomethodology.

There has been a few arguments about whether the epistemology of ethnomethodlogy is 'subjectivism' or 'intersubjectivism'. In this paper I am indebted to Anthony Giddens who proposes an interesting view on these arguments and I question the justice of identifying ethnomethodology with 'subjectivism'.

In the first place, ethnomethodology is roughly characterized. Secondly, 'objectivism', 'subjectivism' and 'intersubjectivism' are defined distinctively. Lastly, the 'intersubjectivistic' phases of ethnomethodology are indicated by explicating that the concept of 'indexicality' is similar to the notion of the 'hermeneutic circle'.

これまで日本では，エスノメソドロジスト以外の社会学者によって，エスノメソドロジーの認識論的立場を「主観主義 (subjectivism)」としてレイベリングする紹介や解説がなされている[1]。しかしそれはやや一面的なエスノメソドロジーについての理解ではないかと考えられる。筆者自身は，エスノメソドロジストでもなければ，エスノメソドロジーに共感を覚える者でもないが，社会理論に関心を寄せる一研究者として，これまでのエスノメソドロジーに対する評価を検討してみようと思うのである。

かつてエスノメソドロジーが主観主義か，間主観主義 (intersubjectivism) か，という問題をめぐって若干の議論がなされたことがある[2]。筆者はこの議論に対してささやかな一石を投じてみたいと思う。本稿では，こうした問題について興味深い所説を提示しているA・ギデンスに主に依拠しつつ，エスノメソドロジーを「主観主義」と同定することへの疑問点を提出するつもりである。

そこで論旨の展開としては，はじめにエスノメソドロジーそのものをごく簡単に特徴づけしておき，次に「主観主義」及び「間主観主義」とは如何なるものかをそれぞれ確認する。それからエスノメソドロジーの指標性 (indexicality) の概念と解釈学的循環の概念との類似性，等を説くことによって，エスノメソドロジーの間主観主義的な側面を指摘したい。

一．エスノメソドロジー出現の社会的背景

1950年代のアメリカ合衆国においては機能主義社会学が隆盛を極めていたが，機能主義は福祉国家のイデオロギーとしての一翼を担っていた(グールドナー)。社会問題は体制内的病理現象とされ，既存の体制(＝システム)を肯定する立場から秩序調整的な弥縫策を施すことを自明化させ，ドラスティックな革命志向が生じることを抑えていた。人種差別問題，非行問題，貧困問題等，すべて政策上の問題とされ，福祉・行政レベルで対処すべきものと考えられていたといわれる。

60年代に入って，体制に有用なテクノクラートの養成機関と化していた大学に対する批判が生じ，学生運動，大学紛争が興隆してくる。紛争は管理社会の下請機関と化した大学教育に対するラディカルな批判となり，大学当局との紛争だけでなく，より広い社会環境，政治体制に対する闘争へと拡大していった。また黒人やその他のマイノリティの異議申し立て運動も同時に盛り上ってきた。このような一連の社会運動は管理社会体制の閉塞性への反発という点で一致していた。こうした時代的背景のもとで，様々な人々が様々な観点から意味世界を構築していることが次第に明らかとなった。さらにこのような社会の動揺は，意味世界構築のメカニズムを説明する理由を希求させることになった[3]。

以上のような状況の中でエスノメソドロジーはいわば醸成されてきた訳だが，グールドナーによるとエスノメソドロジーは次のように評される。「それは疎外された若者たちが比較的安全な形で，既存の秩序に反抗し，自己自身の能力を試すことのできるひとつの方法なのだ。実際，エスノメソドロジー的な〈実験行為〉は，小規模ながら現状との一種の対決行為であり，暴力を用いない現状への抵抗なのである。それは若者たちが変革する力をもたず，またしばしば変革しようとも思わない，より大きな社会構造の代替物であり，またそれに対する象徴的な反抗である。それは手に届きそうもない革命の代わりに，身近かな反乱を提供する。…(中略)…ここで提示されるしばしば難解で不恰好な定式が非常にしばしば若者たちに歓迎されるという事実は，それがこれら青年の一部がもつところの新しい感情構造に合致するということのしるしであると同時に，パーソンズ社会学に代わることを標榜するものであれば，ほとんどなんにでもしがみつこうとする，若者たちの態度を示している。…(中略)…ガーフィケルの社会理論は政治的に行動主義的な一九六〇年代に，とりわけ現時点の政治的に反抗的な学園にこそふさわしい社会学である。」[4]

二．エスノメソドロジーについて

ガーフィンケルによれば，エスノメソドロジーとは「日常生活の，組織化された巧妙な実践である偶然的で継続的な遂行としての『指標的表現 (indexical expression)』やその他の実際の行為の合理的諸特性を研究すること」[5] である。エスノメソドロジーという用語はガーフィンケルの造語であり，元来は人々が社会の成員として日常生活の中で，意味付与，意味構築してゆく社会成員自身の方法論をさし示していた。それが次第にこうした研究対象それ自体，もしくはこうした研究にかんする方法論もエスノメソドロジーと呼ばれるようになった[6]。エスノメソドロジーは，日常的活動をあらゆる実際の目的のために可視的にし，そして報告可能とする，つまり，通常の日常的活動の組織化として「説明可能なもの」にする，成員の方法として日常的活動を分析するのである[7]。

社会の成員は説明活動のための一連の方法体系を身につけているとされ，それを研究することがエスノメソドロジーなのである。ガーフィンケルは「人々は自らの状況説明活動が『首尾一貫した，計画性に富んだ，矛盾のない』，合理的なものであることを自他に納得させようと努力することを通して，ひとつひとつの相互作用場面をそれに関与するひとびとにとって共通の意味をもつ揺ぎないものにしてゆき，組織の秩序をつくり出し，ひいては社会秩序を支えているとみるのである。」[8] その場合，科学的合理性の尺度や規準を用いて人々の指標的表現を矯正しようとしてはならない。エスノメソドロジーの目標は社会的慣行の説明可能性それ自体を説明可能にすることであり，一般的レベルにおいてこれらの実行を分類・説明しようとする理論によって指標的表現を矯正することを試みることではない。それゆえエスノメソドロジーにおいては研究者も日常生活者も区別なく「社会学を行っている (doing sociology)」と考えられている。エスノメソドロジストは社会の世俗的成員がその日常生活の過程において行っている社会学と専門的な社会科学者によってなされる社会学とを区別しない[9]。

これらのことはガーフィンケルの次の言葉の中に含意されている。「エスノメソドロジーの研究は社会学的方法についての手びき (manuals) を作成することを志向しているが，決して『標準的』手続きをつけ加えるものではない。」「エスノメソドロジーの研究は矯正手段 (correctives) を定式化したり，論じたりすることを志向していない。」[10]

ガーフィンケルは彼が「構成的分析」と呼ぶものと，もしくは正統派社会学と，エスノメソドロジーの間には調和し難い関心の相異があると述べている。なぜなら後者は経験的多様性における指標的表現の記述的研究に限定されるべきであるからである。この態度は「エスノメソドロジー的無関心」の一つとして述べられている[11]。

このような訳で，エスノメソドロジーは「ドキュメンタリー解釈法」ないし「デモンストレーション」といった方法を採用する。それは会話分析という手法であったり，人々の日常性に反するような行動を敢行することに

よってその反応を記録・分析する方法である[12]。エスノメソドロジーは以上のような方法をつうじて日常生活の自明視された内的論理を明らかにしようと試みているのである。

三．主観主義と客観主義

本節においては「主観主義」と「客観主義 (objectivism)」という，社会学の主要な認識論的用語を整理しておきたい。さしあたりここでは「主観主義」と「客観主義」とを対質的に捉え，その意味内容を確認してゆこうと思う。

社会学における「客観主義」を明確に示しているのはT・パーソンズの「分析的リアリズム (analytical realism)」の概念であるといえよう。これは経験的知識や理論の性質にかんするパーソンズの基本的な考え方である。パーソンズはこの発想がカント，ウェーバー，ヘンダーソン，ホワイトヘッド等の影響を受けて形式されたものであることを記している[13]。

「分析的リアリズム」の意味するところはおおよそ以下のとおりである。すなわち，すべての経験的観察は「ひとつの概念図式の見地から (in terms of a conceptual scheme)」なされたものであり，事実とは「概念図式を用いてなされた現象に関する経験的に検証可能な言明」(ヘンダーソン) として理解されるべきだとされる。事実の記述は概念図式を必ず含み，それは外的実在の単なる模写ではなく，外的実在を選択的に秩序づけるのである[14]。「科学的理論の体系によって体現されている事実は，そこに含まれている具体的現象について完全に記述し尽すものでなく『一つの概念図式の観点から』言明されたものにすぎない。つまりその時点で用いられている理論体系にとって重要な現象に関する事実のみを体現しているというまさにこの理由によって，科学的理論体系は抽象的なのが一般的である。」[15]

さて，A．シュッツとの往復書簡に関する回顧録において，パーソンズは社会的行為理論の対象としての行為者の主観的状況は概念図式をつうじてのみ捉えうる，としてシュッツを批判している。「シュッツのばあい，私が思いますには行為者の主観的な状態はフッサールのいわゆる『現象学的還元』をとおして直接体験に近づくことができるのであり，そのような『体験』は，ヘンダーソンの用語を使用するなら，いかなる種類の『概念図式』によっても組織化される必要がないという見解をとるのです」[16]。そして主観的な現象は観察者によって記述されまた分析されるものとしてのみ意味を持っている，とパーソンズは論じている[17]。つまり行為者の主観的状況を考慮するのはあくまで科学的な観察者の概念枠組みから認識されるかぎりにおいてのみである。

以上のように客観主義とは，研究者の側で構成した恣意的なモデルや図式を研究対象にあてはめて分析すればよい，という見解と考えることができる[18]。

こうした客観主義的な認識論に反対して，A．シュッツは，社会科学者は行為者の主観的状況を行為者の観点から理解すべきである，という。何故なら，社会科学の対象である生活世界 (Lebenswelt) あるいは日常生活の世界 (the world of everyday life) が，自然科学の対象とは異なり，あらかじめ解釈された(pre-interpreted)世界であり，有意味的な文化的世界であるからである。まず第一にそのような有意味的世界に即した解釈がなされねばならない。シュッツは社会理論を構築するための不可欠の手続きとして「主観的解釈の公準 (the postulate of subjective interpretation)」を提起している。「主観的解釈の公準は正しく理解すれば，単に次のことを意味しているにすぎない。すなわち諸々の主体が社会的世界の内部で行なう諸々の活動に対して，そしてまた，行為者が企図，利用可能な手段，動機，関連性などの体系といった観点から行なう自らの活動の解釈に対して，われわれはつねに言及することができる――また或る一定の目的のためにはそれらに言及しなければならない――ということを，その公準は意味しているにすぎないのである」[19]。

上に引用したように主観的解釈の公準は，行為とその背景を行為者の観点から解釈しなければならない，としているのである。社会科学者は世俗行為者とは全く異なる関連性の体系に導びかれているにもかかわらず，日常生活の世界のなかで相互行為のパターンを観察する人々と類似した仕方で研究を進めなければならない[20]。

シュッツの場合，現象学的な知見をもって，研究者の側から一方的に概念図式を押しつけて社会を分析するといった客観主義的な研究手続きを括弧づけ（判断停止）する。そして学の確実な基礎としての日常生活者の主観的意識を科学的な先入見なしに（現象するままに）記述し，解明しようとする。

以上のことをふまえてここで主観主義を暫定的に定義しておきたい。主観主義とは(1)個別的そしてアド・ホックに構成される主観的意味を，(2)研究主体の側から先入見や概念装置を押しつけることなく，行為者の見地に立って行為を理解しなければならない，とする認識論であるといえる。

しかしながらこのように規定した場合，主観主義に該当するのは，以下に触れるように歴史主義的な解釈学あるいは感情移入論 (empathy theory) の主唱者であって，シュッツを全き主観主義とみなすことには無理があるように思われる。何故ならシュッツは以下のように述べているからである。「人間行為を理解するためには，それを多少ともよく知っている個性的な行為者に還元する必要はないのである。人間行為を理解するためには，そうした行為を類型的状況で生じた類型的行為として説明できるような類型的行為者の類型的動機が見つかればそれで十分である。いつでも，またどこでも牧師や兵士や召使いや農民の行為の動機には，ある程度の一致がみられるのである。」[21]

シュッツを厳密に主観主義として把握できないのは，シュッツが感情移入論とは異なり，(1)の個別的そしてアド・ホックに構成される主観的意味を必ずしも追求しようとしないからである。いいかえれば，シュッツは意味の発生源を個々の主観のみに設定している，と確言することが困難だからである。

では次に主観主義の名に相応しい歴史主義的な解釈学，及びそれとの対比における間主観主義の意味についてみてゆこう。

四．解釈学における「理解」概念の変容

A．ギデンスによれば，古い解釈学（ドロイゼン，ディルタイ，ウェーバー）の「理解(verstehen)」概念は，感情移入，追体験，想像的再構成として把捉されていた。それは自然科学とは異なる精神科学 (Geisteswissenschaften) 特有の方法とみなされていた。自然科学が，自然事象における因果連関を確定する法則定立的 (nomothetic) な学問であるとすれば，人文現象を扱う精神科学は個性記述的 (ideographic) な学であり，その方法は追体験的理解（＝主観主義的理解）なのである。この解釈学は歴史主義的であった。歴史主義では，自己の時代の概念や表象で考えるのではなく，時代精神のなかへ身を移しかえ，その時代の概念や表象によってものを考えねばならないとされている[22]。

しかし，この「理解」概念は，実証主義者から仮説索出的意義しか認められないものとして軽視されている。というのは理解それ自体は確証 (confirmation) を与えないからである[23]。

実証主義における「理解 (verstehen)」の解釈はT．アベルの所説が代表的である[24]。アベルは「理解」を「ある行動の状況を，それが解釈者のある個人的経験と類似している，という仕方で分析する」作業とみなし，ディルタイ，ウェーバー流の個性記述的，主観主義的「理解」について論述している。アベルによると「理解」には二つの限界がある[25]。ひとつは「理解」が個人的な経験に由来する知識に依存しているということである。諸個人の情緒的経験は相対的に接近不可能なため，多くの解釈は，テストにさらされるべき蓋然的な主張にすぎない。第二の限界は「理解」が検証の方法ではない，という事実にある。従って「理解」という作業は科学的研究において決定的に重要な要素ではないのである。こうした限界は「理解」を科学的分析用具から除外する[26]。だが「理解」には科学的研究に貢献しうる積極的な機能がある。「理解」は研究主題の予備的考察における補助手段として役立つのである。さらにたとえそれが仮説を検証するために用いることができないにせよ，仮説を構成するにあたってとりわけ有効である，とされる。

また論理実証主義者ヘンペルは「理解」にかんして以下のように述べている。「論理実証主義者は，特定の個人についての想像的同定が，その人の信念，希望，恐怖，目標にかんする仮説を推定しようとしている研究者に対して，有益な仮説索出的な補助用具をしばしば提供する，ということを強調した。しかし，このようにして獲得された仮説が実際に正しいか，否かは客観的な証拠と照合して決定されなければならない。」[27]

以上のように精神科学独特の方法としての主観主義的な理解概念は，実証主義からの批判に甘んじなければならない。追体験，感情移入，直感等は仮説や仮定を索出する意義しかないものとして版づけられてしまう。

ところが現代の解釈学における「理解」概念はその意味合いを変化させている。ハイデガーを端緒として，ガダマーによって達成された，いわゆる「解釈学の存在論的次元への転回」[28] と呼ばれる経緯がそのことを端的に示している。ガダマーは，ディルタイ同様，「理解」を自然事象の説明とは根本的に異なっている，とする。しかしその理由は「理解」が意味的経験の心理的「追体験」に依存しているからではなく，二つの準拠枠組，もしくは様々な文化的枠組の間の相互作用に依存していると考えるからである。理解とは，テキストの著者の主観的経験の内面に自己を措定することではない。テキストに意味を与えている「生活様式」を，研究主体の所属する「生活様式」の観点から把握することである。ゆえに理解は「伝統 (Überlieferung)」と「伝統」との対話をつうじて遂行されるのである。

ガダマーは「追体験」という理念を放棄するとも

に，ウェーバー、ディルタイが試みたような客観的知識の探究も放棄する。解釈学的循環の理念によると，理解に寄与しうるあらゆる解釈は解釈されることを既に理解していなければならないからである。すなわちいかなる解釈も先－理解という前提から自由ではないからである。解釈学的循環によって人間的事象を理解することは「方法」ではない，とガダマーは言う。むしろそれは活動している人間の対話の存在論的過程なのである。

ガダマーの解釈学は後期ヴィトゲンシュタインの観点と同じく，言語を生活様式に基礎づけられた社会的・公共的現象であるとみなしている。諸個人の自己理解ですら公共的に利用可能な言語によってのみなされうるのである。但し，ヴィトゲンシュタインの言語ゲームは閉鎖的な意味的世界であって，言語ゲーム間の媒介という発想はヴィトゲンシュタインにはない。他方，ガダマーにとって，対話をつうじての諸生活様式の媒介は彼の議論の出発点である[29]。

ガダマーの哲学的解釈学において「理解」概念は、間主観主義的な「理解」概念へと変容した。それはヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論と同じく，主体に対する言語ゲーム（=「伝統」）の先在性を認めるのである。このように間主観主義は，意味構成の起源を個々の主観ではなく，間主観的な言語や解釈規則に求める点で主観主義とは異なるといえよう。さらに研究主体自身の解釈枠組なしには，研究対象が属している解釈枠組を認識することができない，とする点も主観主義とは異なる。換言すれば研究主体の言語ゲームがあってはじめて研究対象の言語ゲームを対自化でき，対話が可能となるのである。

他方，研究対象の間主観的な有意味性を考慮することにおいて，間主観主義は客観主義とも相違している。つまり間主観主義は，研究対象が含まれている伝統を研究主体のパラダイムの見地から把握しようとする点で，客観主義と区別され得るのである。そこには解釈学的媒介・翻訳という営為が存在している[30]。

五．指標性と解釈学的循環

エスノメソドロジーの指標性 (indexicality) の概念が解釈学的循環の概念と類似していることをギデンスは指摘している[31]。エスノメソドロジーの指標性とは，「諸客体や諸事象の文脈的性質」、あるいは「社会的現実の継続的な構成を完全なものにする行動，環境，発話の特性」である[32]。ある文脈内に位置づけられない場合，行動や発話はそれだけでは意味が曖昧で多義的である。(典型的な例として，指示代名詞とか感嘆詞のみの文を想い浮かべればよい。）こうした，表現の明確な意味は，文脈が与えられなければ決定され得ない。

バー＝ヒレルは「指標的 (indexical)」という用語を，表現や語が，ある文脈に対する指標として作用していることを示すのに用いた。そのような表現は，文脈を「指示している (index)」，つまり文脈の指標になっているのである。個々の発話や表現は文脈によってその意味を明確化させられる訳だが，逆に，或る文脈内に置かれた発話や表現はその文脈の指標となる，ということを指標性の概念は含意している。

指標的表現がコミュニケーションにとって本質的であること，そして指標的表現ないし文脈依存的な表現を除去し，文脈から解放された表現を使用しようとする論理学者や一般意味論者の試みは，その試み自体が指標的表現を含んでいるので失敗する運命にあること，等についてはバー＝ヒレルとエスノメソドロジーの間で一致がみられる。

しかしエスノメソドロジーの指標性の概念においては，文脈が「随時提供される (open-ended)」性質を有している点で，バー＝ヒレルの用法とは異なる。エスノメソドロジーにおける「文脈」は固定的ないし静態的なものではなく，その中心と周辺がつねに変化しているものなのである[33]。人々はこうした文脈の中に発話や行動をあてはめることによって特定化した意味を創造し続けている。このような発話と文脈の相互の絶えざる精緻化の過程は，解釈の無限の循環を生み出すのである[34]。

一方，解釈学的循環におけるテキスト解釈は部分から全体へ，全体から部分への恒常的な往復運動である。読み手は全体についての最初の評価によって部分を理解し，そうじて理解された部分から翻って全体を再評価する。テキスト全体について豊穣化された理解は部分を明らかにし，逆もまた同様である。その循環が先入見に決定され続ける閉塞的な悪循環に陥らないためには，限りない，そして開放的な循環でなければならない。

ここでテキストを会話に置き換えてみると，会話全体についての先行把握によって会話の個々の意味（＝部分の意味）が明確化され，次に，明確化された個々の会話の意味が全体としての会話をよりよく理解させる，ということになる。これはまさにエスノメソドローの指標性の謂である。従って発話と文脈の相互精緻化過程としての，開放的で無限の解釈の循環としての指標性は，解釈学的循環に非常に類似した概念であるといえよう。

ギデンスは詳細な例証を行ってはいないが，エスノメ

ソドロジーを主観主義の一形態として表示することは誤りである，と述べている[35]。何故ならガーフィンケルは，ガダマーやヴィトゲンシュタインと同じく，意味創造の場が個々の行為者の主観的意識ではなく，集合体の規則や規準であるという見解を採っているからだ，という。筆者はこれをそのまま肯定する訳ではないが，少なくとも間主観主義的な要素をエスノメソドロジーが保持していることは認めてもよいと思われる。エスノメソドロジーは個々の主体が意味構成を行う際に不可欠な先在的枠組として「文脈」を設定していると考えられるからである。

指標性と解釈学的循環との相似は上述したとおりであるが，ヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」も語の意味の状況依存性を強調することにかんしては指標性と相通ずるものがある。行為や語の意味は，普遍的，客観的に存在せず諸々の状況としての言語ゲームの中ではじめて明示される，といった言語ゲーム論における議論を考慮するとき，指標性と言語ゲームの類似は明白である。ガーフィンケル自身，指標的表現について考察した先駆的な哲学者のひとりとしてヴィトゲンシュタインを挙げている[36]。この点からも，エスノメソドローを単に主観主義とみなすことの問題性を見い出すことができよう。

六．結びにかえて

本稿の目的は表題にもあるとおり，エスノメソドロジーが主観主義的認識論を採用していないと思われる局面を提示することであった。さらに，そうした作業の過程で，社会学における認識論の用語を整理しておくことも筆者のねらいであった。

最後にここで考えてみたいことは，従来，ある理論や学説に対して客観主義であるとか主観主義だということで批判がなされてきたこと自体が間違っていたのではないか，という点である。

人類学では etic 分析と emic 分析という二つの研究方法が区分されている。emic は文化の内面からの理解を目指し，ひとつの文化のみを研究する。これは主観主義的な方法であるといえる。etic とは研究者が設定した外的尺度によって研究を進め，諸文化を比較的に見る方法である。etic はいわば客観主義的な手法である[37]。しかし実際には両者は相互に前提し合っており，純粋に etic あるいは emic な分析というものはありえない。両者の差異は截然としているのではなく，程度の差といいうる。しかも両者のどちらかが正しく，他方が誤っているなどということはできない。

社会学においても純然たる客観主義的分析や主観主義分析を想定することは難しいのではないか。いかなる客観主義的分析も対象の主観的要素を完全に無視することはできないし，どんな主観主義的分析といえども研究者自身の利害関心と無縁ではなく，それに基づいて構成された概念装置が前提となっている。とすれば etic, emic の場合と同じく，社会学における客観主義と主観主義は絶対的な対極点にあると考えるよりも，相対的な傾向として捉えるべきだろう。そしてその際どちらの傾向が強い分析であろうと，それが正しいか，誤りかということは決定し難い。人文諸科学では主観的要素を考慮した方が有益なことが多いと思われるが，反対に研究者の客観主義的な誤解が当事者や行為者には気付かれなかった興味深い事柄を明らかにすることもあるからである。

こうしてみると，社会学を含む人文諸科学は実質的には間主観主義的な作業，つまり（ガダマー的な意味での）解釈学的営為なのであって，研究者自身の認識枠組を重視したり，逆に主観性をなるべく考慮しようとしたりする種々のヴァリエーションがみられるにすぎないといえよう。その意味で主観主義だから問題があるとか，客観主義だから間違っているとかいうこれまでの論議の在り方自体が修正されるべきだと筆者には思われるのである。

(注)

1) 山口節郎「社会と意味」(勁草書房) 下田直春「社会学的思考の基礎」(新泉社) ・
2) 山口　前掲書と社会学評論132 における江原由美子氏による同書についての書評
3) 加藤春恵子『エスノメソドロジー』「基礎社会学Ⅱ社会過程」(東洋経済) p. 183
4) A. Gouldner *The Coming Crisis of Western Sociology* 1970　グールドナー「社会学の再生を求めて」(新曜社) p. 74
5) H. Garfinkel *Studies in Ethnomethodology* p. 11 Prentice-Hall, Inc. Englewood Cliffs, New-Jersey 1967
6) 加藤　前掲書　p. 175
7) H. Garfinkel *Studies in Ethnomethodology* vii
8) 加藤　前掲書　p. 181
9) A. Giddens *New Rules of Sociological method* p. 38 Hutchinson 1976
10) H. Garfinkel, *Studies in Ethnomethodology* viii
11) A. Giddens, *New Rules of Sociological method* p. 39
12) 下田　前掲書　p. 112
13) T. Parsons, *Social Systems and the Evolution of*

Action Theory p. 27 The Free Press 1977

14) T. Parsons, *The Structure of Social Action* p. 28 The Free Press 1968 パーソンズ「社会的行為の構造Ⅰ」p. 54（木鐸社）

15) *ibid*, p. 35 前掲書 p. 75

パーソンズの社会システム論の前提としてこうした客観主義的な認識論が存在していることに改めて注目しておきたい。

16) R. Grathoff (ed.) *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons* p. 116

Indiana University Press 1978「社会理論の構成——A. シュッツ T. パーソンズ往復書簡——」p. 236～p. 237（木鐸社）

17) *ibid*, p. 88 前掲書 p. 195

18) これはパーソンズ自身が述べているように「新カント派的」な認識論である。つまり現実を認識することは，ひとつの価値観点を選択し，そこに立脚して素材を秩序づけることによってはじめて可能になる，という発想である。

19) A. Schutz *Collected Papers I* p. 35 Martinus Nijhoff, The Hague 1962「社会的現実の問題〔I〕」p. 88（マルジュ社）

20) *ibid*, p. 40 前掲書 p. 93

21) A. Suhntz, *Collected Papers II* p. 13 Martinus Nijhoff, The Hagne 1964「現象学的社会学」p.170～p. 171（紀伊國屋書店）

22) Otto Pöggeler (hrsg.) *Hermeneutik Philosophie* Nymphenburger 1972「解釈学の根本問題」p. 201（晃洋書房）

23) A. Giddens, *New Rules of Sociological Method*, p. 55

24) T. Abel, 'The Operation Called *Versthen*' The American Journal of Sociology, Vol. 51 1948 p. 211～p. 218

25) *ibid*, p. 216

26) *ibid*, p. 217

27) C. G. Hempell 'Logical Positivism and the Social Sciences' in *The Legacy of Logical Positivism*. p. 191

28) 溝口宏平『解釈学哲学の基礎と課題』梅原猛，竹市明弘編「解釈学の課題と展開」p. 54（晃洋書房）

29) A.Giddens, *Studies in Social and Political Theory*, p. 173 Hntchinson 1977

30) 近年，人文諸科学において広く主観主義ないし間主観主義的な見地から研究を進めてゆこうとする傾向が認められる。こうした傾向が生じた原因としては，現象学あるいは人類学の影響が考えられる。現象学の影響を受けたものとしては，A. シュッツの現象学的社会学，エスノメソドロジー，現象学的精神医学，等が挙げられる。

現象学的精神医学とか現存在分析と呼ばれている研究法は，従来の精神医学における自然科学的先入見を排除した後，精神病者の世界を内側から了解・記述し，事象そのものへ迫ろうとする。その場合，「志向性」の概念が適用される。現存在分析は精神病者の幻覚や妄想や異常行動といった症状を，なに者かに向けられた，なに者かへの志向性を具えている心象言語や身体言語と考える。患者を独自の生活史の中に位置づけられた現存在とみなし，そうした現存在が発している心象言語や身体言語の意味や志向対象を患者の立場に立って，患者とともに解読してゆこうとしている。

人類学や民俗学の視点を取り入れたのは最近の社会史研究である。現代の視座から過去を理解するのではなく，その歴史時代の人々の観点から過去を捉えようと試みている。とくにマルセル・モースの『贈与論』等から示唆を得た，西洋史や国史の研究が生み出されている。ドイツ史の阿部謹也，国史の網野善彦，勝俣鎮夫，笠松宏至，等の業績は注目に値する。

経済学分野ではポランニー派経済人類学（ドルトン，サーリンズ，等）が，未開社会に需要・供給の価格関係としての市場原理を想定する形式主義に対し，実体主義を唱えている。未開社会に，産業社会における経済合理性や営利経済的解釈を形式的に持ち込んで分析するのではなく，実体主義経済人類学は未開社会を経済が社会に埋め込まれた社会として実体的に把握する。産業資本主義的偏見を捨てて，未開社会に即した分析を行っている。

ところで山口昌男は人類学が現象学的視点をこの分野の成立の前提として持っているという。その理由は「他文化の生活世界の視点を己れのものとするためには，人類学の調査者は，必然的に自らの文化に対してエポケーをあえてするという手続きを前提として持っている」からだとされる。山口が指摘するように認識論に関する現象学と人類学的思考との近接性は再認識されるべきだと考える。cf. 山口昌男「文化の詩学Ⅰ」（岩波書店）p. 186～p. 187

31) A.Giddens, *Studies in Social and Political Theory* p. 173～p. 175

32) Leiter, *a Primer on Ethnomethodology* p. 115, p. 156, Oxford University Press, 1980

33) *ibid.* p. 114, p. 115

34) 知識にかんするこうした考え方は，B. バーンズが "finitism" という用語で表現している。バーンズによるとファィナイティズムは，固有の特性や意味が概念に付着しており，そしてそれが概念の将来の正しい適用を決定する，という発想を否定する。これは知識の規約的性格にかんするラディカルな見解と直接つながっている。知識は我々が思考したり，行為する様式を規定する規約の体系ではない。逆に，規約的なものを規定したり，規約的枠組みを維持し，展開させるのは我々の決断と判断である。

ファィナイティズムの中心的主張は，適切な用法はその場その場での判断の連続を含む過程において，その都度その都度展開してゆくということである。概念の適用は個人のレベルでは判断の事柄であ

り，共同体のレベルでは同意の問題である。概念の適用は open-ended であり，修正可能だと考えられている。ファィナイティズムは特にヴィトゲンシュタインの著作において見い出され，さらにヴィトゲンシュタインに依拠している人々(ガーフィンケル，ヘッセ，クーン等)にも見られとされる。cf. Barry Barnes, *T. S. Kuhn and Social Science*, p. 30 Macmillan 1982

35) A. Giddens, *Stndies in Social and Political Theory*, p. 175

36) Garfinkel & Sacks 'On Formal Structure of Practical Actions', in Tiryakian and Mckinney (ed.), *Theoretical Sociology* p. 384 New York 1970

37) 白川琢磨『現代人類学理論における「分類」の諸問題』「哲学」第73集（三田哲学会）所収